

「文部省唱歌の世界」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

「唱歌」。何という美しい、また日本的な歌でしょうか。英語では「歌」を意味する「song」があるものの、唱歌に対する言葉は見当たりませんが、私たち日本人には「唱歌」という歌が明確に存在し、今もなお輝きを保っています。

私たちが「唱歌」と聞いて真っ先に思い浮かべるのは、いわゆる「文部省唱歌(もんぶしょうしょうか)」といわれる歌の数々ですが、それらは明治末期から編集された「尋常小学読本唱歌(じんじょうしょうがくどくほんしょうか)」や、あるいは「尋常小学唱歌(じんじょうしょうがくしょうか)」に代表されるものが有名ですね。

しかし、唱歌はそれらばかりではなく、例えば「鉄道唱歌」のように、学校とは無関係のものも親しまれていますし、また、いわゆる軍歌も「戦時唱歌」と言い換えられることもあることから、唱歌の一種であると考えることができます。

つまり、真面目な、そして広い意味で教育的な目的でつくられた歌が唱歌であるといえ、その点では、明治期につくられた「紀元節」や「天長節」、あるいは旧制高校の寮歌やキリスト教の讃美歌(さんびか)も、唱歌と同類であるといえるのです。

では、我が国において、唱歌はどのような歴史をたどったのでしょうか。話は明治初期にさかのぼります。

明治 5 (1872) 年、明治新政府によって学制が公布され、その際に小中学校における音楽教育も規定されましたが、具体的には何の準備もできていませんでした。その後、明治 12 (1879) 年に文部省(現在の文部科学省)に音楽取調掛(おんがくとりしらべがかり)が設立され、アメリカ留学帰りの伊沢修二(いさわしゅうじ)が御用掛(ごようがかり)に任命されました。

伊沢は、アメリカの音楽教育家であったメーソンを我が国に招き、音楽教員の育成方法や教育プログラムの開発を行うとともに、我が国初の官制唱歌である「小学唱歌集」を、明治 14 (1881) 年から 17 (1884) 年にかけて、3 編に分けて発表しました。

当時は、我が国に教材にできる楽曲がほとんどなかったもので、欧米の学校唱歌から日本人向けの旋律(せんりつ)を選び、これに日本語の歌詞をつけて唱歌としましたが、その多くが我が国固有の五音音階(ごおんおんかい)、つまり 4 番目の「ファ」と 7 番目の「シ」の音がない、いわゆる「ヨナ抜き音階」でした。

また、歌詞の流れも我が国古来の万葉集(まんようしゅう)にさかのぼる、「五・七・五」からくる「七五調」のリズミカルな旋律が多かったため、小学唱歌集は多くの日本人に親しまれるとともに、掲載された歌の多くが、その後に発表された官制あるいは民間の唱歌集に受け継がれました。

歌集に収められた曲の一部には、「見渡せば(むすんでひらいて)」「蝶々」「螢の光」「仰げば尊し」「庭の千草」などのように、現在もなお歌い継がれているものがあります。

なお、スコットランド民謡の名曲である「アニーローリー」もこの歌集に収められていますが、歌詞が紫式部(むらさきしきぶ)と清少納言(せいしょうなごん)を称える「才女」となっています。

「小学唱歌集」の発表後も、明治 20 (1887) 年の「幼稚園唱歌集」や、イングランド民謡の「埴生(はにゅう)の宿」が収められた明治 22 (1889) 年の「中等唱歌集」など、次々と官制唱歌が発表されたほか、民間からも明治 21 (1888) 年に「明治唱歌」などが刊行されました。有名なスコットランド民謡の「故郷の空」は、「明治唱歌」に収められています。

また、明治 34 (1901) 年に東京音楽学校(現在の東京芸術大学音楽学部)から発行された、官制唱歌の「中学唱歌」では、日本人の作詞・作曲の意欲の向上のために、あらかじめつくられた歌詞に対する作曲を懸賞募集としましたが、これに見事当選したのが滝廉太郎(たきれんたろう)であり、「箱根八里」や「荒城の月」などが収められています。

その後、音楽の進歩発展ぶりや、それに比して民間唱歌が乱発行されているのを憂慮(ゆうりょ)した文部省が、「日本人の子供を教育する唱歌は日本人の作詞・作曲によるべきである」として、当時の「尋常小学読本(じんじょうしょうがくとくほん)」の中に出ていた詩に日本人が作曲したものを中心に、「尋常小学読本唱歌」が明治 43 (1910) 年に発表されました。

「尋常小学読本唱歌」の中では、「ツキ(お月さま)」「ふじの山」「春が来た」「虫のこえ」「水師営(すいしえい)の会見」「われは海の子」などが現在も有名です。

そして、「尋常小学読本唱歌」の流れを引き継ぐかたちで、文部省が尋常小学校の学年別に編纂(へんさん)したのが、明治 44 (1911) 年から大正 3 (1914) 年にかけて発表された「尋常小学唱歌」でした。

「尋常小学読本唱歌」に収められた歌をすべて取り込んだほか、1 学年ごとに 20 曲の合計 120 曲がすべて日本人の作詞・作曲によるものであった「尋常小学唱歌」は、まさに明治初期以来の「唱歌教育」の賜物(たまもの)といえました。

その一方で、「尋常小学唱歌」に収録された曲のほとんどが、先述した「ヨナヌキ音階」であったほか、曲全体が「起承転結」など行儀(ぎょうぎ)よく整っており、終止音も「ド」あるいは「ラ」と判で押したように同じとなった単調さが、もう一つの大きな特徴でもありました。

また、これは「尋常小学読本唱歌」も同様ですが、「尋常小学唱歌」は、文部省が当時の東京音楽

学校に依頼して編纂委員会を組織させ、音楽学校の教授を中心に構成された編纂委員が合議して作詞・作曲されたものでした。

このため、著作権は文部省が所有するとともに、個々の詞あるいは曲の作者が伏せられてしまったことから、これらの唱歌の多くが「作詞・作曲者不詳」となっています。なお、唱歌の中には「春が来た」「朧(おぼろ)月夜」「故郷(ふるさと)」のように、後に個々の作詞・作曲者が判明したとされる曲があるものの、その多くは根拠(こんきょ)が弱いとされています。

では、「尋常小学唱歌」に収録された曲の中で、今もなお有名な曲を学年別にいくつか紹介しましょう。

1年

「日の丸の旗」「鳩(鳩ポッポ)」「人形」「かたつむり」「桃太郎」

2年

「浦島太郎」「案山子(かかし)」「紅葉(もみじ)」「雪」

3年

「茶摘(ちゃつみ)」「汽車(今は山中)」「村祭」「冬の夜」

4年

「春の小川」「広瀬中佐」「村の鍛冶屋(かじや)」「橘中佐」

5年

「鯉のぼり(いらかの波と)」「海(松原遠く)」「冬景色」

6年

「朧(おぼろ)月夜」「故郷(ふるさと)」

皆様の思い出の歌が、これらの中にあるでしょうか。また、今回紹介した以外にも、「尋常小学読本唱歌」あるいは「尋常小学唱歌」の中で、皆様それぞれの愛唱歌が存在することでしょう。

さて、大正期に入ると数々の童謡がつくられるようになり、文部省の検定も受けずに、勝手に学校で教えられるようになりました。こうした事態を受け、文部省は昭和に入ってから「尋常小学唱歌」を見直し、一部を削除して新しい歌を入れたうえで、昭和7(1932)年から「新訂尋常小学唱歌(しんていじんじょうしょうがくしょうか)」の発行を開始しました。

「新訂尋常小学唱歌」で新たに発表され、現在でも有名な歌としては、4年生用の「牧場の朝」、6年生用の「スキーの歌」などが挙げられます。

その後、昭和16(1941)年に小学校が国民学校に改編されると、いくつかの歌の入れ替えを行ったうえで、1年生用が「ウタノホン」、2年生用が「うたのほん」、3年生から6年生用が「初等科音楽」と分けられて発行されました。これらの中では、1年生用の「ウミ(海は広いな)」「おうま」や、2年生用の「たなばたさま」、6年生用の「スキー」が今も知られています。

我が国が終戦を迎えると、昭和22(1947)年から昭和23(1948)年にかけて、最後の文部省発行

となる「一ねんせいのおんがく」から「六年生の音楽」が発行されました。我が国がGHQ(=連合国軍最高司令官総司令部)による占領を受けていたこともあり、戦争を連想させる歌が削除されたり、あるいは歌詞を書き換えさせられたほか、外国の作品も取り入れられたりするなど、これまでの唱歌とは大きく様変わりしました。

これらの唱歌集で収録された曲では、1年生用で、かつての「小学唱歌集」の「見渡せば」の曲を活かした「むすんでひらいて」や、「ぶんぶんぶん(蜂が飛ぶ)」、3年生用の「小ぎつね」、4年生用の「かえるの合唱」「アマリリス」「夜汽車」、6年生用の「思い出」「よろこびの歌(ベートーベンの第九)」などが有名ですが、実は紹介したすべての曲が外国由来のものです。

その後、教科書がそれまでの国定教科書から、文部省による検定教科書とされたため、民間会社発行の教科書が主流となりました。一部の唱歌は「検定済教科書に必ず採録すべき歌」とされたものの、時代の流れとともに唱歌が歌われなくなってきているのは残念な限りです。

また、GHQの占領政策の悪影響によって、歌詞の書き換えあるいは一部削除を受けたり、中には存在そのものが抹消されたりした数々の歌が、独立回復から60年以上、そして戦後から70年以上が経過しているにもかかわらず、未だに「名誉回復」がなされていないのも大きな問題ではないでしょうか。

ここからは、数々の唱歌の中から有名な数曲を選び、講師である私(黒田裕樹)自身が歌いながら、その詳細を紹介したいと思います。

荒城の月

土井晩翠 作詞

滝廉太郎 作曲

1. 春高樓の 花の宴
はるこうろう えん
めぐ さかざき
巡る 盃 かげさして
ちよ え い
千代の松が枝 わけ出でし
昔の光 いまいずこ

2. 秋陣營の 霜の色
じんえい しも
鳴きゆく雁の 数見せて
かり
う つるぎ
植うる 剣に 照りそいし
昔の光 いまいずこ

3. いま荒城の 夜半の月
こうじょう よわ
かわ た
替らぬ光 誰がためぞ
かき かずら
垣に残るは ただ 葛
あらし
松に歌うは ただ 嵐

4. 天上影は 替らねど
てんじょうかげ かわ
えいこ
栄枯は移る 世の姿
写さんとてか 今もなお
ああ よわ
嗚呼荒城の 夜半の月

われは海の子

文部省唱歌

1. われは海の子 しらなみ 白浪の
 さわ いそべ
 騒ぐ磯辺の 松原に

 けむり とまや
 煙 たなびく ※1 苫屋こそ

 わ すみか
 我がなつかしき 住家なれ

2. 生まれて潮に しお ゆあみ 浴して
 なみ
 浪を子守の 歌と聞き

 き
 千里寄せくる 海の気を

 す わらべ
 吸いて 童と なりにけり

3. 高く鼻つく いそ か 磯の香に
 ふだん
 不断の花の かおりあり
 なぎさの松に 吹く風を

 がく われ
 ※2 いみじき 楽と 我は聞く

4. ※3 丈余の ※4 ろかい あやつ 操りて
 ゆくて なみ
 行手定めぬ ※5 浪まくら

 ももひろちひろ
 ※6 百尋千尋 海の底
 遊びなれたる 庭広し

いくとせ
5. 幾年ここに きたえたる
かた
鉄より堅き かいなあり
吹く塩風に 黒みたる
しゃくどう
はだは赤銅 さながらに

なみ ひょうざん
6. 浪にただよう 氷山も
きた きた おそ
来らば来れ 恐れんや
あ
海まき上ぐる たつまきも
おこ おこ おどろ
起らば起れ 驚かじ

のりだ
7. いで大船を 乗出して
われ とみ
我は拾わん 海の富
のりく
いで軍艦に 乗組みて
われ まも
我は護らん 海の国

- ※1 苫屋＝苫(とま、「むしろ」の意味)で屋根を葺(ふ)いた家のこと
- ※2 いみじき＝立派な、素晴らしい
- ※3 丈余＝一丈(約3m) 余りあること
- ※4 ろかい＝船を動かす艚(ろ)と櫂(かい)のこと
- ※5 浪まくら＝船中で旅寝をすること、または「船路(ふなじ)の旅」
- ※6 尋＝長さの単位で、約1.8m (=6尺)

私たちが学校などで聞いたり歌ったりしてきた「われは海の子」は、3番までの歌詞しか知られていませんが、実は7番まであるのをご存知でしょうか。ではなぜ今では3番までしか歌われていないのでしょうか。

「われは海の子」の歌詞をすべて読めば、これが「海洋国家日本に生まれた男子の成長の歌」であることがよく分かります。

1番で故郷である海辺の住家をイメージして、2番から4番までで、幼少期から成長期までの流れを歌った後、5番でたくましく成人した「海の男」と、6番でその心意気を示し、そして7番で海洋国家である我が国を護る決意をあらわすという、見事な物語として完結しています。

ところが、大東亜戦争の敗北後に、7番の歌詞が「国防思想や軍艦が登場するのはケシカラン」という理由で、GHQの指示によって教科書から削られてしまい、その流れを受けて、戦後の教科書では3番までしか教えられなくなってしまっているのです。

しかし、我が国が海洋国家であることを理解させるとともに、青少年に国防への認識を早くから広めるためにも、小学校の段階で「われは海の子」を7番まですべて教えることには大きな意義があると思います。

加えて、7番の「いで大船を乗出して 我は拾わん海の富 いで軍艦に乗組みて 我は護らん 海の国」という歌詞は、北方領土や竹島、あるいは尖閣(せんかく)諸島といった我が国固有の領土を意識させるのに、この上ない「生きた教育」になるのではないのでしょうか。

私たちの貴重な財産である唱歌をありのまま歌い継ぐことは当然であるとともに、我が国と国民の未来のために思えば、それが使命でもあるのです。

故郷

高野辰之 作詞
岡野貞一 作曲
文部省唱歌

うさぎ か
1. 兎 追いし彼の山

こぶなつ か
小鮒釣りし彼の川

めぐ
夢は今も巡りて

ふるさと
忘れ難き故郷

い か ちちはは
2. 如何にいます父母

つがな
恙 無しや友がき

雨に風につけても

い
思ひ出ずる故郷

こころざし
3. 志 を果たして

いつの日にか帰らん

山は青き故郷

水は清き故郷

【歌詞の意味】

1. 野兎を追ったあの山や、小鮒を釣ったあの川よ。今なお心巡る思い出深き故郷よ。
2. 父や母はどうしておいでだろうか、友は変わりなく平穩に暮らしているだろうか。風雨の度に（苦勞をする度に、という意味）思い出す故郷よ。
3. 自分の夢を叶えて目標を達成できたら、いつの日にか故郷へ帰ろう。山青く水清らかな故郷へ。

螢の光

いながき ちかい
稲垣千穎 作詞

スコットランド民謡

1. 螢の光 窓の雪
ほたる
書読む月日 重ねつつ
ふみ
何時しか年も すぎの戸を
いつ
開けてぞ今朝は 別れゆく
2. 止まるも行くも 限りとて
かた ちよろず
互みに思う 千万の
はし ひとこと
心の端を 一言に
さき
幸くとばかり 歌うなり
3. 筑紫の極み 陸の奥
つくし きわ みち おく
海山遠く 隔つとも
うみやま へだ
その真心は 隔てなく
まごころ へだ
一つに尽くせ 国の為
つ ため
4. 千島の奥も 沖縄も
ちしま おく おきなわ
八洲の内の 守りなり
やしま うち
至らん国に 勲しく
いた いさお
努めよわが背 恙無く
つと せ つつがな

「螢の光」は、本来は4番まであるのですが、戦後になってからは2番までしか歌われていません。その理由を探る前に、まずは1番と2番の歌詞の大意を紹介しましょう。

1. 螢の光や雪に反射して窓から差し込む月の光を使って、書物を読む日々を重ねていると、いつの間にか年月が過ぎ去っていき、今朝は杉でできた扉を開けてクラスメートと別れていく。

※「年月が『すぎ』ると、『すぎ』の戸を開けるのをかけている。

2. 故郷に残る人も、出て行く人も、今日限りでお別れということで、互いに思う数限りない心のうちを、「無事であれ」というひと言に込めて歌う。 ※「かたみに」は「互いに」の古語。

では、いよいよ本題に入りましょう。3番の歌詞は、筑紫は九州、陸の奥は陸奥(みちのく)、つまり東北のことですから、「我が国のどこにしようと国のために真心を尽くしなさい」と解釈できますね。

3番が歌われなくなった理由としては、大東亜戦争後に、軍国主義を過剰なまでに排除する風潮が高まったことで、歌詞の「一つに尽くせ国の為」が敬遠されてしまったからのようです。歌詞全体をよく読めば、愛国心を持つとともに相手を思いやり、社会に貢献するという当然の内容だと思うのですが…。

最後に4番ですが、八洲とは「多くの島」という意味で、島国である我が国の別称です。従って「その内」、すなわち我が国の領土には「千島の奥」も「沖縄」も含まれるという意味に解釈できますね。

「千島の奥」は千島列島すべてを意味しますから、明治8(1875)年に樺太・千島交換条約を結び、また明治12(1879)年に沖縄県を設置した後でつくられた歌詞であるということが分かります。ちなみに、4番の歌詞は我が国の領土が拡大するたびに変化していきました。

「千島の奥も台湾も 八洲の内の守りなり」
(日清戦争後に台湾を領有)

「台湾の果ても樺太(からふと)も 八洲の内の守りなり」
(日露戦争後に南樺太を領有)

その後、大東亜戦争で我が国が敗戦した際に、樺太や台湾を手放しただけでなく、千島列島がソビエト連邦(現在のロシア)に不法占拠され、また沖縄が長い間アメリカの支配下に置かれたことで、「実情に合わない」からと歌われなくなってしまったようです。

沖縄が返還されてから早や40年以上が経過した現在、我が国固有の領土である北方領土の存在を絶えず意識するためにも、当初の歌詞である「千島の奥も沖縄も」を堂々と歌い継ぐべきではないでしょうか。(完)

主要参考文献：「日本の唱歌（上・中・下）」（編集：金田一春彦・安西愛子 出版：講談社）

YouTube 再生リスト「文部省唱歌の世界」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML7uj5fTA2DmJff9UIFcTnod>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>